

鍋倉聰著
『シンガポール「多人種主義」の
社会学
—団地社会のエスニシティ—

世界思想社 2011年、302pp.

中村昇平
 Shohei Nakamura
 京都大学 文学研究科 /
 博士後期課程
 日本学術振興会

本書はシンガポールにおける人種間関係の展開を、国家政策と住民生活とのミクロレベルでの関係性を鮮明に描き出すことによって明らかにした著作である。ではシンガポール社会の「人種」を論じる際に、なぜ「団地」に注目するのだろうか。

シンガポール共和国は、多「人種」主義を国是とし、華人Chinese、マレー人Malay、インド人Indian、その他の人種Others (CMIO) がその差異を維持しながらも調和し、全体として単一で平等な「シンガポール国民」を形成することを理想として掲げ、そこに独自の「国民文化」を見出すことに多大な国力を傾注してきた国家である。しかし一方でこの国家は、1965年の独立以来続く人民行動党 (PAP: People's Action Party) の一党支配の元で、住民の生活の隅々にまで介入し、これを一元的に管理しようとしてきた点でも際立っている。人種主義政策の実施においても国家のこうした性格は顕著に表れており、「多様性」を称揚し、国家が規定する4人種分類 (CMIO) 間の差異は認め、強化する一方で、各々の (公定) 人種内部においては極端な標準化・同質化を強行する。国家のこうした強権的管理は住民の生活のインフォーマルな側面にまで及び、人々が4人種の分類に差異化し続けるよう推し進めるとともに、各人種内部においてはその公定標準型に均質化するよう強いるのである。このことは例えば、多人種主義政策の一環としての公的言語教育において、華人に対しては北京語に近い「華語」の教育のみを認めると

いうことに顕著に現れている。シンガポールの華人人口は、実際には福建語話者や潮州語話者、広東語話者が多数を占めており、そのほかにも様々に異なる華語諸語が日常に使用されている。にもかかわらず、各「人種」内部のこうした差異や多様性は国家による際限ない介入と標準化の標的となるのである。

そして、シンガポールの状況においてこうした住民の管理への欲望が最も分かり易く現出する国家政策が、「国民総団地化計画」なのである。PAP長期政権開始直後の1960年代から本格化したこの国家政策は、1980年代に入って国民に占める団地居住者の割合が8割以上で推移する段になってその完成をみた。国民総「団地化」を実現した後も国家の団地開発は推進され続け、今度は団地総「分譲化」が本格化し、全団地戸に占める分譲戸の割合は現在では9割を超える。こうした団地において、住民の居住地選択 (団地の購入及び売却の際の選択) を始めとする住民の意思は、「多人種混住政策」に則って団地棟ごとに制定された (公定4人種の) 人種割合目標その他の規制による厳しい制限を受ける。

このように、住民の8割までもが分譲団地に居住し、そうした団地を基盤とした日常生活の隅々にまで国家が際限なく介入し、管理しようとするのがシンガポールという国家の特徴である (第2章)。そしてこの団地こそが、国家が人種4分類という公定の「多様性」に人々を標準化していこうとする際

の結節点となっているのである。以上のような特色をもつシンガポール社会の人種間関係を理解する為の出発点として、著者は第1章でフォーマル・エスニシティとインフォーマル・エスニシティという分析枠組みを提示する。これによって著者は、国家の際限ない管理と、その介入を受ける住民との間のマイクロな交渉によって特徴づけられるシンガポール社会の人種間関係を包括的に理解することを目指す。

このように著者は、第1章でエスニシティ研究の系譜を丹念に整理することで、国家と住民の日常生活とのせめぎ合いに焦点を当てるべく、フォーマル・エスニシティ／インフォーマル・エスニシティという分析軸に注目し、第2章では、一元管理国家シンガポールの特徴を最もよく示す人種主義社会・総団地化社会という二つの側面を概観した。こうした認識の下に、著者は第3章でシンガポールにおける多人種主義の研究の系譜を、第4章から第6章まででは現代に至るまでのシンガポールの団地化の進行過程を詳細に整理する。

まず第3章では、1970年代以降の多人種主義研究の問題点が検討される。ここに欠落しているのは、住民の日常生活からの視点である。これまでの研究では、複合社会のネーション・ビルディングの中で国家が独自の国民アイデンティティを獲得しようとする試みは素朴に肯定される傾向にあったし、国家が推進する公定エスニシティは住民によく受け入れられ、両者はよく調和しているということが検証なく前提とされる傾向が強かった。

続く第4章から第6章では、1960年代以降の国家の団地政策の詳細な検討がなされる。著者はまず第4章で1960年代から1990年代に至る団地研究を整理する。ここでもその欠点として指摘されるのは、住民の生活に密着した視点の欠如である。団地における住民の生活実態を重視し、介入する

国家の圧倒的な力の前になす術をもたない住民の苦悩を強調し、国家政策と住民の生活との齟齬を指摘する「嘆きの立場の研究」は、1970年代後半以降見過ごされ、団地研究は、国家の団地政策がいかに住民の幸福に寄与し、人種混住政策によって団地生活における人種間関係の調和がいかに達成されているかを裏付けるための手段となってしまった。

さらにシンガポールの団地研究においては、総団地化社会実現後、1980年代後半に始まる、団地再開発の動向への注目が不足している。著者は第5章で、賃貸団地の取り壊しプログラムと団地の総分譲化に始まり、分譲団地のアップグレード・プログラムと取り壊しに至る、総団地化以降の団地政策を概観する。この中でも特に、「土地の有効活用」を大義として1995年に始まった分譲団地取り壊しプログラム（SERS=Selective En-bloc Redevelopment Scheme: 選択的全棟再開発計画）に注目し、第6章でその経緯を詳細に検討する。SERSは、アップグレード・プログラムのように居住環境向上という名目で団地ごとの住民の投票によって決定されるのではなく、土地の活用という名目で住民の意思と無関係に行われる。この分譲団地取り壊しプログラムこそは、住民を管理する国家の力が最もよく表れる事例なのである。

こうして、第2章で概観したシンガポール社会の特質を念頭に、第3章から6章まででは人種研究と団地研究双方における住民からの視点の欠落が指摘された。これを踏まえて、第1章で提示したフォーマル・エスニシティ／インフォーマル・エスニシティという分析軸を基に、第7章と第8章で著者は、分譲団地取り壊しプログラムの前後の2つの団地にそれぞれ焦点をあて、団地住民の日常生活におけるエスニック現象を詳細に観察することで、国家の人種政策（フォーマル・エスニシティ）

の圧倒的な介入に晒されながらも独自の共同性を構築しようとする住民の日常実践（インフォーマル・エスニシティ）を詳細に記述する。

ここで明らかにされるのは、個人々が複数の言語（福建語・広東語・マレー語・シングリッシュ他）を用いて人種に関係なく親密な関係が展開される団地生活の実態であり、そうして構築された親密な関係性を容赦なく打ち壊す分譲団地取り壊しプログラムによって、経済的・社会的な苦難に直面する住民たちの生々しい実態である。団地下のスペースに自前のプラスチック椅子を並べて世間話に興じることで形成された親密な人間関係、そしてそうした関係性が、行政の近隣交流イベントをきっかけとしてさらに広く、多彩に展開していく様子（第7章）や、路上屋台からの連続性をもつ公設の屋台集積センターで展開する親密な多人種混成状況（第8章）。ここでは公定の4人種分類への同質化とは相反する、より多様なエスニックな分類への差異化と、他言語使用によってそうした差異化を乗り越える日常的共同性が顕著に現出している。しかしこうした状況は国家の取り壊し計画の標的となり、住民の精神生活に安らぎと彩りを与えていた共同性は、たちまちその維持と創出が物理的に困難な状況に追い込まれてしまう。自由に展開する世間話の場となっていたプラスチック製の椅子は行政に撤去され、取り壊しプログラムによって住民は散り散りになっていく（第7章）。人々の憩いの場となっていた屋台集積センターは4人種の分断をより促進する構造へと再建に追い込まれ、経済的理由から多くの店主は廃業・撤退を余儀なくされる（第8章）。

しかしながら、著者が強調するように、こうした国家の圧倒的な力に晒されながら、それでも住民はしぶとく日常的共同性を維持し、また、新しい共同性を創出しようとしていく。馴染みの野良猫に

餌をやる為といって、タクシーに乗ってかつての近隣住民との世間話を楽しみにくる転居住民がおり、椅子の撤去後も世間話は場所を移して細々と継続され、団地階下では食事会が催される（第7章）。再建後の屋台センターでも、しぶとく生き残った屋台店主を中心として住民がそれまでの親密な関係性を維持している（第8章）。

本書を通して著者が明らかにしたのは、団地社会シンガポールの住民が、その日常生活において公定の4人種分類よりも遥かに多彩なレベルで経験するエスニックな差異化と、そうした差異を軽々と乗り越えて住民が形成する親密な共同性であった。国家の意図にそぐわないこうした差異化や共同性の創出は、絶えず国家による徹底的な介入に晒され、より国家が管理し易いものへと配置し直されていく。しかしながら、こうした公定分類（フォーマル・エスニシティ）に回収されることの決していない多様な複合エスニック状況と、そこで住民が創出する共同の日常の実践（インフォーマル・エスニシティ）こそが、多人種社会シンガポールに彩りと調和を生み出している源泉なのである。

ただ、本書の考察対象となった団地住民は、主に60代から80代の高齢住民であった。国家の人種政策の影響をより深く内面化していると考えられる、独立以降に生まれた若年世代の日常の実践がより詳細に考察されれば、シンガポールにおけるエスニック状況の時代による変化がより鮮明に描き出せたのではないだろうか。

また、本書で対象にされているのは主にシンガポール国民であったが、労働移民など国民以外の人口がかなりの多数を占め、それが国家政策において重要な位置を占めるこの国において、独立後の移民を始め、国民以外の住民をも視野に入れる必要性は高いのではないだろうか。この点に関しては本来他の研究に任せられるべきものであるだ

ろうが、そうした考察は、より重層的で多元的にシンガポールの多エスニック状況を描き出すことにつながり、他地域の状況を考察する際にもさらに豊かな示唆を与えるに違いない。逆に言えば、本書はこの先そうした研究が住民の視点に立った分厚い考察とともに展開していく際の豊かな基盤を提供したといえる。

シンガポールは、国土・人口規模のコンパクトさと国家の経済規模の大きさのために、人種分類を用いた国家の住民に対する管理という側面が最も顕著に表れる国の一つではある。しかし、植民地時代から続く国家支配と人種分類のこうした密接な相互作用は、まえ被植民地であった国民国家には遍くみられる現象であり、その点は長く指摘されてきた。さらに、北米や西欧の先進国民国家においても、旧植民地からの移民を中心とした複合エスニック状況における国家の管理と住民生活との軋轢は、近年社会問題としてますます深刻なものとなっている。シンガポールにおける国家と住民間の関係を住民の日常生活という視点に立って詳細に明らかにした本書は、シンガポールが国家の介入という側面を最も極端に顕著に示す国であるからこそ、より一層大きな示唆を他地域の研究に対しても与えるだろう。